

鳥取大学農学部 准教授 笛吹達史

ソウル大学獣医学部で行われるアジア獣医系大学ジョイントシンポジウムに参加するため、2月22日の朝、米子鬼太郎空港から韓国仁川空港へと飛んだ。空港の入口が指定されていたこと以外には何事もなく（この日は竹島の日だった）、あっという間に韓国に到着した。仁川空港では平昌オリンピックのマスコットキャラクターである白虎とツキノワグマの大きなぬいぐるみが我々を迎えてくれた。博多空港からほぼ同じ時間に到着した山口大学と鹿児島大学の一行と合流し、バスでソウル市内へ向かう。おそらくソウルではいつもの光景と思われる交通渋滞に巻き込まれながら、宿泊先の明洞（ミョンドン）にたどり着いた。

明朝、ソウル大学へはタクシーで向かった。昨日ほどひどくはなかったが、朝の交通渋滞の中、40分程で目的地に到着する。ソウル大学の動物病院の大きな建物を横目に眺めながら、少し雪の積もった坂道を歩いて獣医学部棟へ。あちこちでそろいの白衣を来た学生が行ったり来たりしているところは日本とあまり変わらない（鳥取大学ではそろいの白衣は着ていないが）。獣医学部棟の Schofield Hall と Kim In Young Lecture Room のあるフロアがシンポジウムの会場となっていた。ソウル大学教授の木村順平先生の挨拶と進行でジョイントシンポジウムは始まった。ソウル大学と岐阜大学連合獣医の2大学間で立ち上がった本シンポジウムは、山口大学連合獣医、台湾大学、東京大学と徐々に参加大学を増やしながらか、今回で9回目を迎える。日本、韓国、台湾の獣医系大学から参加した大学院生と教員が一同に介するにぎやかなシンポジウムであった。

ソウル大学スタッフの心遣いもあって、シンポジウムは和やかな雰囲気に進んだ。1日で全てのスケジュールをこなすためか、ポスター発表の時間が短いようには感じたが、口頭の研究発表では、我が山口大学連合獣医からも4名の学生が発表し、1名は優秀発表賞受賞者うちの1人となった。英語での口頭発表は日本の学生の多くが不得意とするところかもしれない。まずは研究内容が重要であることは別として、私が聴講して感じていたのは、英語の上手下手よりも、顔を上げて、堂々と、そしてゆっくりと説明していた学生が高い評価を受けていた。研究分野は違ったが、そのような発表は分かりやすかったように思う。私にとっては初めの参加であったが、同じ獣医学を学ぶ者としての連帯感なのか、ジョイントシンポジウムはアットホームな雰囲気に包まれていた。おそらく研究分野が異なっていることもあり、発表後の質疑応答にも殺伐とした空気は感じられなかった。大学院生の皆さんは、ぜひこのような機会を利用し、海外での研究発表の経験を積んでみてはどうだろうか。



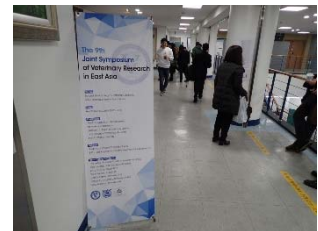
白虎のスホランとツキノワグマのパンダビ



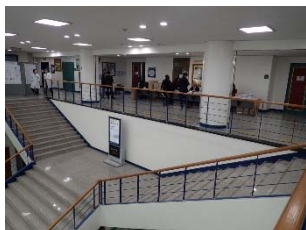
雪の残る通学路



Veterinary Medical Teaching Hospital



ジョイントシンポジウム会場



会場ホール前スペース



優秀発表者の授賞式



病院見学の様子
(説明は日本語)



山口大学連合獣医大学院参加メンバー